HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光客と地域住民の社会的相互作用に関する研究 : 交換理論の適用可能性の検討
Author(s)	岡本, 健
Citation	北海道大学観光創造フォーラム「ネオツーリズムの創造に向けて」. 平成20年2月29日～平成20年3月3日. 札幌市.
Issue Date	2008-03-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34709
Type	conference presentation
Note	要旨は、『北海道大学観光創造フォーラム「ネオツーリズムの創造に向けて」報告要旨集』、北海道大学観光学高等研究センター、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻、pp.127-130 に掲載
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	20080211abstract.pdf (ポスター要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

観光客と地域住民の社会的相互作用に関する研究

～交換理論の適用可能性の検討～

Application of social exchange theory
to social interaction between tourists and local residents

岡本　健*
OKAMOTO, Takeshi

キーワード：地域住民、観光客、社会的交換理論、情報、情報処理系

１．背景と目的

本稿の目的は２つある。１つは、観光客と地域住民の直接的相互作用の仕組みや、それによって生じる双方への心理的影響を明らかにする上で社会的交換理論(social exchange theory)の適用が有効であるかどうかを検討し、適用上の問題点を明らかにすることである。

１つは、明らかになった問題点について、交換を行う人間を情報処理系として見る人間観と、交換される対象について「情報」の概念を導入する事で解決の方向性を提案することである。

上記のような目的を設定するに至った背景は以下のとおりである。

近年、個々人の趣味の多様化（あるいは多様性の表面化）や、インターネットの普及による観光関連情報へのアクセス簡便化などにより、観光形態が、団体旅行から、個人や小集団での旅行への変化している。

それゆえ、観光地の地域住民は、他律的な観光開発[1)]時には少なかったであろう、観光客との直接的な社会的相互行為を経験する機会が増えていると考えられる。その際、観光客の当該地域に対する評価は、地域住民との相互行為の中での評価と直結するため、地域住民にとって観光客との良好な関係構築はリピーター確保の観点からも重要であろう。

地域住民と観光客との関わりについての実践と研究として、インタープリテーションの分野が挙げられるが、この分野の主な関心は観光資源についての知識や体験の適切な伝達方法の構築にあると言ってよい[2) 3)]。

こうした状況の中で、これまでの観光研究において、地域住民と観光客との心理的相互作用を扱ってきたのは観光心理学であるが、現在までの研究の中心は「観光者」心理学であり[4)]、地域住民の心理について扱っていても、ツーリズムのインパクトに対する地域住民の最大公約数的な態度変容を扱う研究が主であり[5)]、観光客と地域住民が直接的な相互関係下においてどのように関係性を構築していくのかについては、経験的な議論がほとんどであり、理論化に至っていないのが現状である。

２．社会的交換理論の整理

社会的交換理論は文化人類学、経済学、社会学、社会心理学の分野で発展してきた理論であり、様々なものがあるが、その共通内容として以下のように広く理解されている。社会的交換理論とは、人間の行動を他者との報酬、活動、費用の交換過程と見る考え方であり、社会的交換関係において、その交換に必要なコストと、得られる報酬についての評価を行って、自分の利益を生むような社会

*北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻 修士課程

的関係は継続しようとし、自分の利益を生まない場合には交換の修正や停止をするというモデルである[6]。

しかし、その理論の詳細について正確に議論されている文献は少なく、理論への批判や概要の紹介を行っているものが主である[7]。そこで、社会的交換理論の応用可能性とその問題点を検討するため、代表的理論家ホマンズの交換理論を中心に、社会的交換理論の説明対象、理論における人間観、理論における財の性質について整理をする。

（１）社会的交換理論の説明対象

社会的交換理論が対象とするのは、社会的相互作用（社会的場面において個人が他者に働きかけ影響を与えると同時に、他者もその個人に働きかけ影響を与えるという関係が成立していること）がある状況[8]である。

ホマンズは考察する対象を、非公式集団、公式集団、大規模、小規模どの場合においても、対面的接触場面の行動を中心としている[9]。そのため、ホマンズの社会的交換理論は個人対個人での直接的な社会的相互作用のモデル構築に有効とされている。ホマンズに対する批判として、この個人対個人から出発するアプローチで社会システム全体にその理論を拡張しようとしたところに向けられたものがある。

（２）社会的交換理論の人間観

社会的交換理論の提唱者であるホマンズは社会を捉える際に、社会現象の説明のために一般的心理学的命題が必要である[10]と考え、行動心理学的、経済人的な人間観を前提として理論構築を行った。

行動心理学者であるスキナーの知見を集約して以下の５つの命題を設定した[11]。

①成功命題(success proposition)

ある人の行為Ａが報酬を受けることが多ければ多いほど、その人の行為Ａの頻度は高くなる。

②刺激命題(stimulus proposition)

行為Ａが報酬を受けたときの環境状況と現在の環境状況が似ているとき、行為者は行為Ａあるいは、それと類似した行為を行う。

③価値命題(value proposition)

行為結果の価値があればあるほど、その行為の頻度が増す。

④剥奪刺激命題(deprivation-satiation proposition)

集中してある特定の報酬を受けることが多ければ多いほど、その後の単位報酬は次第に価値を失う（限界効用逓減の法則）。

⑤攻撃是認命題(aggression-approval proposition)

行為の結果、期待した報酬を受けなかったり、罰を受けたりするとき、行為者は怒りを感じ、攻撃的な行動をすることが多くなる。そして、その人は攻撃行動の結果を価値のあることとする。

また、交換を行う行為者像はエゴイストである。ただし、自分の利益だけを追求するエゴイストではない。例えば、自分の行動により組織の全員が損をするが自分だけは得をする、といった場合は、組織のために自分の利益率を減らすことはいとわない。ただ、そのような行動を取る理由は、仲間からの非難から生じる損を減らしたいという欲求からであると解釈される[9]。

（３）交換される財

社会的交換理論で、交換される財に関しては、様々な分類が可能であるが、ここでは再交換が可能な財と再交換が不可能な財に分ける。

再交換が可能な財は、吉田民人によって物的資源、情報資源、人的資源、関係資源の４つに分類できるとされている[12]。これらの交換財はそれ自体に所有者への利益あるいは利益への可能性が内包されているため、交換の相手が誰であろうと利益をもたらす財である。それゆえに、この財の交換は経済的交換と捉えられている。

再交換が不可能な財はこれを「行動財」[12]とする。これは、交換する相手にその価値が依存する、援助、感謝、賞賛、会話、接待、愛情などを含んだものである。

３．社会的交換理論の応用可能性とその問題点

これまでにまとめた社会的交換理論の特性を

観光客と地域住民の直接相互関係場面に当てはめてその適用可能性を論じた上で、その問題点を、交換される財と、交換を行う人間に注目して指摘する。

（１）社会的交換理論の応用可能性

2(1)で見たように、社会的交換理論の記述力は個人と個人の直接的関係場面において強力であるから、観光客と地域住民との全体的な傾向分析ではなく、直接的な相互関係場面において適用の可能性が高いと考えられる。地域が一方向的に収奪される関係や逆に観光客の利益が著しく少なくなるような関係、あるいは双方ともに利益を享受している関係、どちらにも利益を与えない関係を分析していく際に有効な理論となりうる。特に命題に関しては、これを用いて、観光客と地域住民の間の関係性を分析することができるだろう。

具体的には、社会的交換理論の枠組みを使うことで、リピーターとなる観光客とそうでない観光客の条件差、あるいは観光ボランティアガイドへ参加し、その活動を持続する地域住民とやめてしまう地域住民の条件差について、明らかにできる可能性がある。

（２）人間観への問題提起

2(2)で見たように、交換理論ではエゴイスティックな人間観が採用されており、観光客と地域住民の相互作用を捉える際には矛盾が生じる。

観光客の性質や地域住民の性質類型に関しては様々な背景からこれを整理する必要はあるが、基本的に観光客は地域住民と接する際に、取引を求めて来ているわけではないため、自己の利益を最大化するというエゴイスティックな動機を前提として、関係を見ることができない。

（３）交換される財の性質に関する問題提起

交換される財を再交換可能か否かにおいて分類したが、観光現場に当てはめた時には、説明できない現象が多くなる。

観光現場には、観光客、地域住民、ともに多様な価値観を持って現れる。そのため、物理的には同じ財であっても、認知する人によって、あるいは同一人物であっても時間や感情状態によってその価値付けは変わってくる。そのため、再交換が可能かどうかという分類では、観光客と地域住民の交換関係をうまく説明できない。

４．問題点に対する解決としての、人と交換財の新しい捉え方の提案

（１）情報処理系としての人間

行動主義的人間観の問題を解決するために、情報処理系としての人間観を提案したい。行動の動因となるものに、情報を摂取したいという原的な人間の性質である「知的好奇心[13)]」を設定し、交換過程をモニタリングし、価値付けを行う機能系として次の３点を挙げる。

①認知系

外界の情報をスキーマ[(1)]によって捉え、認識する。注意容量[(2)]が存在し、知覚した外界の情報を全て均一に取り入れることはできない。

②感情系

認知系で認識した情報から生起し、行動に影響を与える。また、その逆もある。

③価値判断系

①と②の相互作用で情報の価値を決定する。

（２）「情報」としての交換財

交換財を全て「情報」であると規定することで、問題は解消するだろう。この「情報」は環境からの何らかの物理的パターンで、人間に何らかの心の働きを生じさせるもの[14) 15)]と定義する。

こうすることにより、交換財の価値はそれを価値付ける人によって、そして同一人物であっても時間や感情状態によって変化するという状況が成立する。

（３）観光客と地域住民との関係性を分析するための、修正社会的交換理論の提案

このように、財と人に関する新しい見方を導入することで、社会的交換過程は知的好奇心という動因を持った人が、それぞれ相手から発せられる「情報」を受け取り、それを認知系と感情系からなる、価値判断系で処理して、価値付けをする、という修正社会的交換理論のモデルができる

（図.1）。

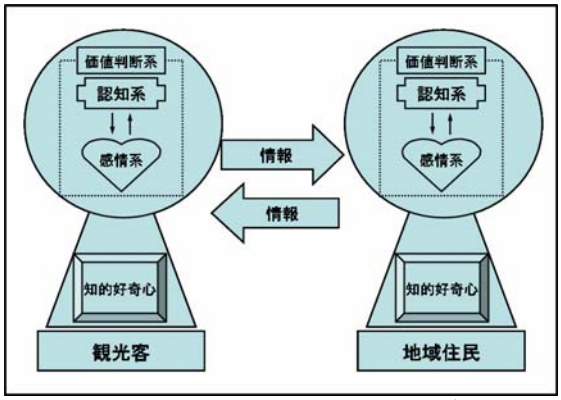

図.1 修正社会的交換理論モデル

５．今後の課題と展望

本稿では、社会的交換理論を観光客と地域住民の心理的相互作用分析への適用可能性と、その問題点を整理し、問題点を改善するために新たな人間観と交換財の捉え方を示し、理論的モデルを構築をした。

今後の課題としては、モデルについてのさらなる理論的精緻化と、実際の観光客と地域住民の相互作用場面に応用することによって、あるいは、実験環境を作り変数を操作し比較することで、その妥当性や問題点を確認していく必要がある。

また、今後の様々な発展として、こういった研究を進めると、人は何故旅に出るのか、という哲学的命題や、双方が満足するコミュニケーションの有り方はどのようなものか、という社会心理学的命題、人間の認知特性として「スキーマ変容欲求」が存在するのではないかという心理学的命題や、知的好奇心など内発的動機付けによる学習支援の有り方、という教育学的命題についての解決の一助となる可能性がある。

【補注】

(1) スキーマとは、外界を認識する際に必要な知識体系のことである。

(2) 注意容量とは、人間は事物に注意を向ける際に、注意資源を使うが、その量は有限であり、その量を表す用語である。

【参考文献】

1) 石森秀三(2000) 「内発的観光開発と自律的観光」『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』石森秀三・西山徳明 国立民族学博物館, pp5-19

2) キャサリーン・レニエ、マイケル・グロス、ロン・ジマーマン(1994) 『インタープリテーション入門』小学館

3) 国土交通省総合政策局観光部 (2000)『実践講座インタープリテーション』日本交通公社

4) 佐々木土師二 (2006)「ツーリズムのインパクトと地域住民の態度 ―観光心理学で取り残された課題に関する文献の概観―」『関西大学社会学部紀要』Vol.37, No.3, pp.197-269.

5) Ap,J （1992） Residents’ perception on tourism impacts. Annals of Tourism Research, Vol.19, No.3,pp665-690

6) 佐々木(2007) 『観光旅行の心理学』北大路書房

7) 久慈利武 (1988) 「交換理論」『現代アメリカの社会学理論』新睦人・三沢謙一 恒星社厚生閣 pp.75-115.

8) 永田(2000) 「交換理論」『社会学の理論』有斐閣 pp.97-109

9) 久慈利武 (1984) 『交換理論と社会学の方法』新泉社

10) G. C. ホーマンズ (1981)『社会科学の性質』誠心書房

11) 橋本茂 (2005)『交換の社会学』世界思想社

12) 安田三郎 (1980)「交換理論」『基礎社会学 第Ⅱ巻社会過程』安田三郎・塩原勉・富永健一・吉田民人 東洋経済新報社

13) 波多野宜余・稲垣佳世子(1973)『知的好奇心』中央公論社

14) 松田隆夫(2000)『知覚心理学の基礎』培風館

15) 吉田民人(1990) 自己組織性の情報科学 エヴォルーショニストのウィーナー的自然観 新曜社